

市野澤潤平（編著）『基礎概念から学ぶ 観光人類学』

■出版地：京都 ■出版社：ナカニシヤ出版 ■出版年：2022年 ■総頁数：187頁 ■定価：2,500円＋税

杓谷 茂樹*

「本書は、観光人類学の教科書である」。本書の編者である市野澤潤平は、「序章 観光人類学への招待」をこの文章からはじめている。彼が「みなさん」と呼びかけている読者は大学生。2022年現在で、大学の学部の「観光人類学」あるいはこれに類した名称で開講される科目の教科書として使用されることを念頭に、本書は編まれたのである。だから本書の目的も次のようにシラバス風に示される。①観光人類学における基本概念を理解する。②それらの基本概念を、観光人類学の知識がない人に、わかりやすく説明できるようになる。③日々のニュースなどで見聞きした、または自分自身が観光旅行において経験したさまざまな事柄について、それらの基本概念を援用しながら、観光人類学の文脈に引きつけて解釈できるようになる。このうち①と②はどの科目でも同じようなことが書かれるので、③が本書を用いた授業ならではの到達目標といえるだろう。そして、市野澤はさらに④諸事象への観光人類学的な理解の土台に立って、自分なりのオリジナルな問いを見出せるようになる、という次の目標まで示している。これによって、読者（学生）は、いま学んでいることが、その先どう発展していくのかについてのイメージをぼんやりとでも持つことができるようになるのだろう。

本書の構成は以下の通りである。当然これは授業の教科書であることが想定された構成だろう。ひと科目が15回の授業＋定期試験でおこなわれるとして、序章を含めて13章からなるこの教科書を用いて授業をおこなった上で、自由に使える時間が2回あるというのは授業担当者にとってはありがたい。

序章 観光人類学への招待——〈観光×文化人類学〉の成り立ちと現在（市野澤潤平）

- 第1章 観光を形作る二項対立およびその無化——ライフスタイル移住にみる新たな観光のあり方（小野真由美）
- 第2章 ホスト／ゲスト、ツーリスト——21世紀の液状化のなかで（吉田竹也）
- 第3章 メディアとパフォーマンス——メディアが媒介する観光地イメージおよび観光実践・経験（川崎和也）
- 第4章 真正性——観光における本物らしさという価値（奈良雅史）
- 第5章 伝統の創造——本質主義と構築主義を巡るせめぎ合い（福井栄二郎）
- 第6章 観光表象——エスニック・ツーリズムにおける表象の政治学（須永和博）
- 第7章 観光経験——旅がわたしに現れるとき（門田岳久）
- 第8章 身体——知覚の主体から感覚へ、そして世界との関わり方へ（土井清美）
- 第9章 接客サービスの高度化——価値を共創するサービス・デザイン（八巻恵子）
- 第10章 ホスピタリティとフレンドシップ——観光ビジネスにおけるホスト／ゲスト関係の多様性と広がり（渡部瑞希）
- 第11章 リスク／不確実性——「不確かさ」とともにある観光のダイナミズム（田中孝枝）
- 第12章 持続可能な観光——環境に優しくあろうとする新たな観光の潮流（岩原紘伊）

いずれの章も、上記した本書の目的③で書かれた「日々のニュースなどで見聞きした、または自分自身が観光旅行において経験したさまざまな事柄」と関連づけながら、学生が各章のテーマに取り組んでいける

* 公立小松大学

ような内容となっている。学部生向けの教科書として書かれているだけに、文章は平易でわかりやすく、全体のバランスも比較的良好とれている。それは、序章で示されたフレームにきっちりハマるように、各執筆者がそれぞれの章の内容や記述レベルをそろえているからだろうか。まずは編者のリーダーシップとこれに答えることができる執筆者の力量あつてのことだが、この本を出版する意味を執筆者全員で共有できていることがよくわかる。

本書の中で執筆者に共通するのは、観光人類学という研究分野の現状に関する認識と、いずれもフィールドでそれぞれの調査対象社会のダイナミズムと対峙している文化人類学者であるという点だといえるだろう。メンバーには新進気鋭の若手研究者が多く含まれている。

序章の最後を、市野澤は「4. 本書の射程：〈観光人類学3.0〉に向けて」というタイトルの文章で締めている。観光現象をホストとゲストの相互作用として捉えるという発想を得ることで観光人類学が生まれた1970年代の議論からはじまり、この二項対立的な思考を軸に、その後の諸議論でさまざまな概念が生み出されていくまでを〈観光人類学1.0〉とするなら、21世紀になり、そうした二項対立的の枠組みが揺れ動いたり、無化されたりする状況が起こってくる様子に注目する新たなステージに入る。これが〈観光人類学2.0〉である。そして、社会が不安定、不確実かつ多様で、これから先自分たちの生活の中のあたりまえがどうなっていくかよくわからなくなってきたいま、これまでの常識や考え方の枠組みをいったん捨て、全く新しい視点から観光を捉えていかなければならないところに我々は立っている。そこで観光人類学にも次のステップたる3.0に移行することが求められるようになってきたということだ。この現在認識は、本書の全ての章で共有されているといえる。

こうした現在の観光人類学の状況認識とそこにいたるまでの経緯は、特に第1章から第3章でわかりやすく説明されている。第1章では近年広がってきたロングステイツーリズムの事例から、日常／非日常の境界線が揺らぎ、二項対立が無化されていく様子が、第2章ではバリ島に長期滞在する日本人の事例の紹介を通して、観光の中でホーム／アウェイという対立関係が揺らぎ、現代人のホームが液状化し多様化している様子が示されている。いずれも『ホスト・アンド・ゲスト』の議論からはじめて、その後の経緯を辿りつつ、

その果てでいま起こっていることとして、観光の現状の捉え方の変遷を説明している。第3章では観光とメディアとの関係の側面から、アーリの「観光のまなざし」論からはじめて、インターネットの登場、そしてSNSが発達していく中で、観光に起こってきた変化が考察されている。インターネット普及以降、我々はWeb2.0という時代を生きているというが、このようなメディアの発達と社会の関係の流れは、観光人類学における関心の変遷ともリンクしていることがよくわかる。

第4章から第7章までも、観光人類学研究で伝統的に重要テーマとして扱われてきた基本概念がならぶ。第4章では真正性の議論をブーアスティンの「疑似イベント」論やマキャネルの真正性の議論が最初に扱われた後に、アーリ等の「ポストツーリスト」に関する議論やテイラーの「真摯さ」に関する議論が起こってくる過程を示している。第5章では伝統の創造についての議論をサイドの「オリエンタリズム」やホブズボウムの「創られた伝統」といった議論をまず押さえた上で、ハワイなどに見られる「戦略的本質主義」を紹介する。第6章でも観光表象に関する議論で、まずはアーリやサイドをはじめとした基本的な研究が紹介されたのち、タイの先住民観光を事例として民族表象の政治学を解説している。そして、第7章では観光経験について語るのに、現象学の説明からはじめて、コーエンやグレイバーンなどの研究の紹介がおこなわれたのち、宗教経験との比較をおこなっている。これらの章の議論は、いずれも事例紹介を交えながら、現代社会の観光のあり様を問い直そうとする方向に開いていく。このように、ここまでのどの章でも、扱っている概念の萌芽から現在へとという流れで説明が進んでいるので、複数の章で説明が重複するところが多々見られる。しかし、本書は教科書なのだからそれでいいのだ。しかも、一般の研究書とは異なり、毎回の授業の組み立てをその1回で完結させる形を意識して構成されているように見える。その結果として、同じ考え方を複数のケースに当てはめながら反復して学ぶことになり、観光人類学の基本概念の深い理解につながる。

これに続く、第8章から第11章までは、いずれも観光に関連した現代的な問題を扱っている。今後観光人類学の分野で議論が広がっていくことが予想されるテーマである。第8章で扱っている身体や第11章のリスク／不確実性というテーマは、文化人類学でも近年たびたび議論の遡上にのせられてきている。一方で

第9章の接客サービスや第10章のホスピタリティなどはもともと観光学で話題となってきたテーマであるが、フィールドに身を置き、インフォーマルセクターにも入って行く文化人類学ならではの視点を持ち込むことで、新たな観光人類学の新たな基本概念になっていくこともあり得るということだろう。

そして、最後の第12章は持続可能な観光としてエコツーリズムとコミュニティ・ベースト・ツーリズム(CBT)を扱っている。現在の学生の中ではいまや生活や学びのあらゆる場面で基本概念となっているサステナビリティを最後に取り上げることで、本書によるここまでの学びが、最後に「腑に落ちる」ことになるように思われる。

さて、本書は大学の授業で使用される教科書として作成されたものだから、章立ても文章の分量もこれで適切であると思う。授業を通して「日々のニュースなどで見聞きした、または自分自身が観光旅行において経験したさまざまな事柄」に学生が意識的になれば、そこから豊かな知的世界が広がっていくはずだ。「基本概念」を知るということは、その入口の扉を開ける鍵を手に入れるということである。だからこそ「基本概念」ということを改めて考えたときに、本書に掲載されているものの他に、より相応しいものはなかったかとは考えてしまう。価値観の多様化と流動化が象徴する現代社会を捉えるための「基本概念」の源泉となり得る事象は、我々の身の回りにたくさん転がっている。例えば、宗教に関連した問題系は良くも悪くも社会の中でそれなりに存在感がある。現代は物質文化抜きには語れないはずだ。負の遺産への訪問や最近よく耳にするようになったダークツーリズムは現代社会で

は一定の意義を持っている。また、健康やスポーツは現代人の関心の大きな部分を占めているし、障害者などのマイノリティの社会的包摂は、いまや観光分野でも盛んに議論がおこなわれている（ユニバーサルツーリズムなど）。そしていまや一般人が宇宙に飛び出す時代である、等々。〈観光人類学3.0〉の形がはっきりしてくるのは、もう少し先のことだろうが、こうした事象の中に「基本概念」となり得るテーマは他にもまだまだあるのではないだろうか。

いまこの教科書で「観光人類学」を学ぶ学生が、社会を第一線で動かしているであろう20年後、30年後には、この「基本概念」の様相もずいぶんと変わっていることだろう。インターネットの普及とWeb2.0社会のあたりまえの姿は、評者が学生だった1980年代前半には想像することすらできなかったわけだが、当然これと同じようなことは、未来のその時にも起こっていることだろう。観光人類学という学問がその時にまだ存続していると仮定すれば、その基本概念もその都度、入れ替わったり、新しいものが追加されていたりするはずだ。そして、観光人類学は3.0から4.0、あるいは5.0へとステージが移っているに違いない。学生たちは、これからの人生、ずっとその社会の変化を目の当たりにし続け、その変化に翻弄されたり、上手く乗り切ったりしながら生きていくのだ。だから現在、こうして〈観光人類学3.0〉を想定した議論の近くに身を置くことができるだけで、学生たちは、今後の社会の変化に対応するための何か大切なものを得られるような気がする。本書を授業で使用したときのシミュレーションを頭の中でおこないながら、ふとそんな未来のことに想いをはせてしまった。